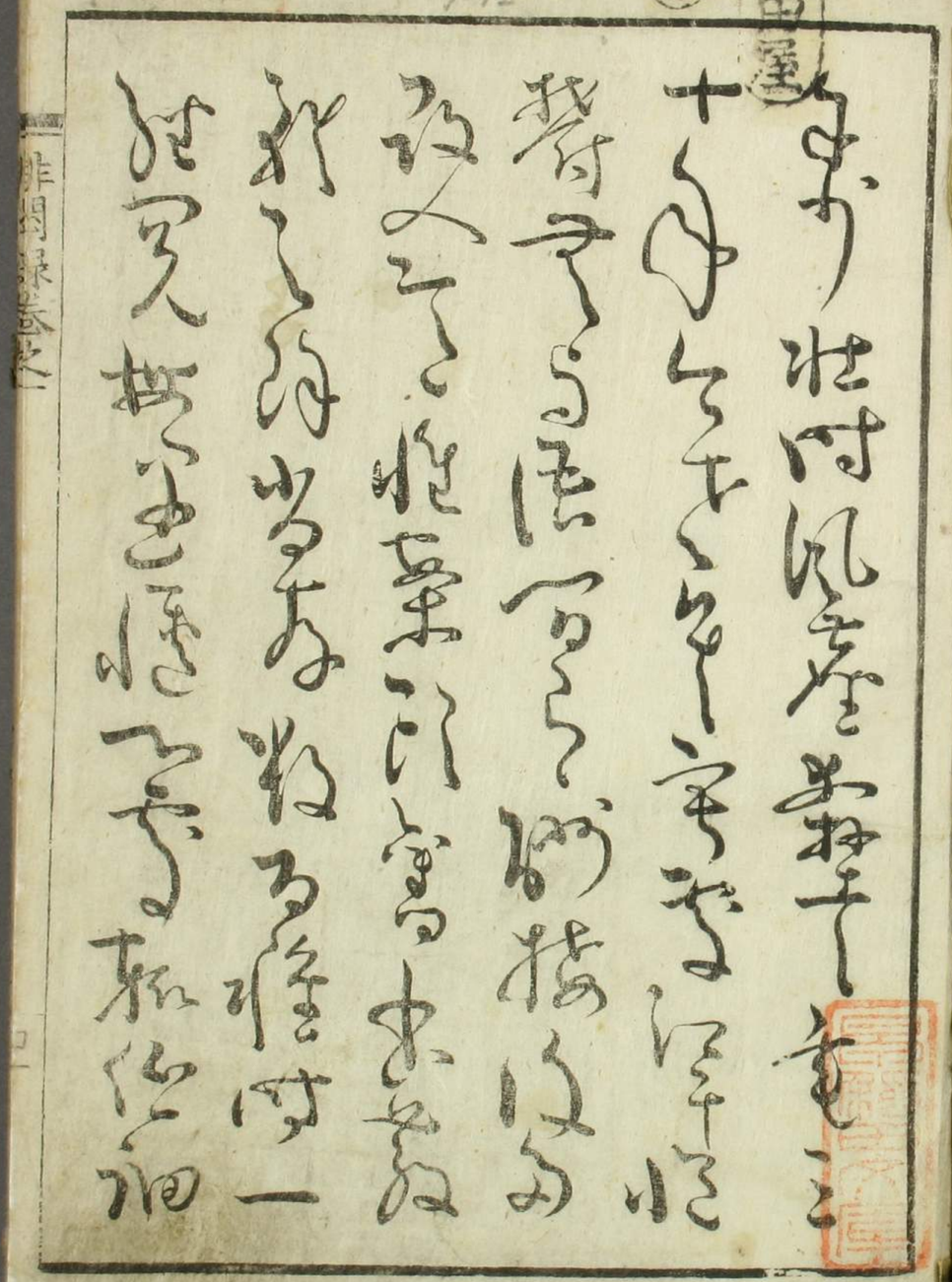
奇說排問録

へ13
3143
1

へ13
3143
1-12

春
吉田屋



梅園翁譯
渓齋英泉畫

排

浪華書林　岡田群玉堂
　　岡田群鳳堂　合梓

九月十一

3143

[illegible]說拙門保敘

六橋園翁以彩筆[illegible]世[illegible]久矣[illegible]
下[illegible]疾[illegible]里[illegible]以求[illegible]
時[illegible]無[illegible]毛[illegible]求[illegible]
謂[illegible]風[illegible]陳[illegible]園博總[illegible]
孔用東印[illegible]海西[illegible]
[illegible]丈人破[illegible]矣[illegible]情[illegible]

言語之味之所時時有某君以清人
拙味拙詩拙詞拙文十二十年來海內之清士
之摘拙詩拙詞二三百首出乎軼內者
益於世道人心出乎味益慷慨激世之
士每之有所憤悶拙詩之所之
使拙之摘於筐中謀釋出於世之事
之所不能辭之從者乎自到歸我使以

而拙詩摘出匣滅于內之昭拙詩於百
年之後吳城之外而易後自感又生
姻人賢子所為吳激情為雷之有血
於世道人心乎世人內之內之
風流之味是出乎內之風流之味
之本於之之味矣為我於東港余居東港
以之居甚適日拙生年規拙是出內贅

一言於寒端

文政丙戌孟冬大村顯揆手録明南

港適園

應用之用君需

吉田屋

排門録巻之一

排門録巻之一

夫の所のより仰せわたせのひかりをもてなんのうの花さきのこゝろより筆をとりてわんの月のうへ先よりてうのふみをもて正しきなりねの仲稽いとゝのうのようのこゝろのまゝ

ふるくからいひとおりの夏某の
翁まつりにきてはいらぬ事ともいはす候まく
書んけりこれはのれよきかひけりんと
いひてかまひろるてかつ入りけるのちさ
てわすれの本をうけしつ給ふをまく
ふところへおしこてつ候のわんなけし
ものことつれたけをしまゝしきいて
ちまかをわくてり〳〵のかゝる

ちわけふゆるくりつゝこまれかくまれとし
へのうへともけりきんる、書きの雅信を
りつきすきまてふくれの翁のまのた
すまわやうあるね人らはれのれかえつさるや
おまへのうへにのはうたそうしやし

竹樹（印）

奇説排悶録 巻一輯全本 六巻総目録

巻之一

孝行之部

唖孝子　孝丐
鬼孝子　冷孝子
于江　珊瑚

奇説排悶録巻之一

孝行之部

唖孝子

崔長生ハ崔ハ姓長生ハ名邛州国の人なり。生まれつき瘖ありて共。其性至孝なり。時の人。唖孝子とぞ。此孝子。唖なるゆえに。人交際なく。入るまじきなり。さて雇工をなりて。其父母を養ふ。常に家を出入するとき。必父母に見えざるなり。紀文の歳。淮徐地名の間。五穀熟せざり。孝子市に出て食を乞。人是を憐れむ。糟糠滓糟の類を與ふ。是を受て。箪の中に入置き。我は草を掘て。木皮を剥て食とす。家に帰りて。足を疾る父と。病ある母を扶て。綵簷の下ゆく。箪中の物を取出して。父母に進む。斯なること。箪常に空しからば。父母是に依て

六樹園翁　譯

死せざるに在り。孝子途を行く。文字書る反古など。落散る紙を見れば必是を拾ひとり。朝日十五日の時に至りて先聖を祭りて孔子の靈廟櫺星門の下に行くに字蹟を燒く其爐をとりて黄河の流れに投げ一日拾ひ紙中に遺金あるを失へる人やあらんと守りて失る人を待ども其人を見ず一月過ぎて此金をもて母親を買て飼やしなふに此親あやまて子を生つげぬ利ゆく遂に父母の衣棺をも作りとり是より前知州事なる孫侯賢とのべる人官に在て卒し本國へ歸葬せんとするに交遊の者一人も葬送る者なかりしに此孝子只一人靈輀を拜し徒跣にて百里の遠き所送行て返り来けり其父母歿せる時哭し働て三日食せず自柩を舁て中野に葬る後其終る所を知らざりしとぞ

孝丐

丐は其處を知らず明の孝宗の時呉の市に在て乞食を此丐得る所の食大方は食ひ殘りて多くは竹の筒又籠の中に貯ふ見る者不審に思ひて其故を尋ねしに丐が曰吾母あり是に遺らんが為なりと云けり事を好む者其説の實否を窮めんとて跡を付き行くに五里許にして川岸の竹樹茂り密に繁り舟を繫ぎ舟を敝け且つ潔げなり老嫗一人其中に座せり丐地に坐して貯ふ所の飲食を出して整へて手に捧げて舟に登り酒食を陳ね跪て母に進む母の杯を擧るを伺て起て唱歌し児の如く戲て母を娛しむ扨其母のありさまを見るに樂く心よげなり母食し止めば又外に出て食を求む一日

例の如く亡ありけども食を得ざるに憊るる甚だしく沈孟淵と云
隱君子ありなほ甚だしく食を與へる上少く助力をぞ遺る丙ひそを
已餓ぬとも母に食を與へざる以前は聊も食ふ事をせで斯る事
年ありて母遂に死ぬ丙そなより行方知れずなりぬ此丙ぞ沈姓
なりと云々年は三十ばかりゆくぞ在しやや

鬼孝子

閩中の国名鬼孝子と云者ありし生れて七八歳の比父は外に在て死し
家は畜へる粮あり孝子幼少なれども已が力の限を出して業を勤て母
を養ふ母をして其室に安らしめんの外に他に志なし孝子や
病せんとする比某氏の女に聘を遣りて置ていまだ娶らざりしが想ふに

孝子疾ありて身うせぬ是より母一人あむ所なくとありしは鄰人某
かの母を娶んと思て媒者を呼て曰汝鄰の婦人に言へ汝が夫死して年
久く汝が子又卒に亡びぬ汝が家三尺の童子なり その上衣食ともに乏
汝何を以自終らんとする吾汝と老を偕にせんと欲す汝それ是を許さんや
媒者此を聞て悉其母に告ぐ母の意に是を許さんと云ひて此夜母の室
中に孝子の声嗚々然として悲を環ぬ母に告て曰兒死せりと雖兒が
ぬ死ぬ兒と母と其形は相隔ぬとも其魂は相依まり今隣人吾母
を奪ひんとす吾母將是を許さんとして玉ふや母驚て哭て曰身を失すれ
豈吾が子の志なんや始に汝が父死玉へども汝ありて吾を養ひ今汝
死せり吾何をか頼まん汝我が為に謀れ我何を以て世を渡らん孝子

曰兒が生る時寔に力を以て母を養へり其時餘力ありて某氏の女と聘せり
兒不幸にして早く身まかりて母の依恃に所なし某氏吾聘物を帰さ
ざく母の為に計るべし母曰某氏聘を帰さんとせば如何にせん孝子曰
兒彼に語るべしと云へ此夜ひそかに某が家に異なる事あり驚て死
に受くる聘物を倍償て其母を帰しつ此財によりて月日を送りるべ三
年ばかり経て財皆なくなりぬ母なる者孝子の堰を呼て之を告けるに孝
子が曰兒生てよく力を以吾母を養へり死しても亦よく力を以て五母を
養ふべし母が云汝すでに鬼となりくいんぞ力を以て我を養ふ孝子曰母
市中に行て物擔者を見るべ語て告べし汝平日擔ところの荷を倍して
擔へ吾兒汝を佐くべと云王へ母其ことを市に入て擔者に逢てことく

語る擔者の曰汝が兒をでに死せりいづく吾擔ところの物を佐くや母なる是
を試よと云擔者つひに一倍の荷を擔へる孝子陰に添て佐る故に擔
者疾走るる平日の如し因て得る所の錢を以て半を其母に與へ孝子
日々に擔者を佐て是が母為に安く世を過りて死に至りとぞ
嗚呼孝子なる哉父死して後よく母を養ひ身死して後よく精魂其
母を周旋して母をして生平の節を全くせしめ其上死力を以て荷を持て
母を養ひ老に至らむそも孝子の德なる死も間なる所なるか

冷孝子

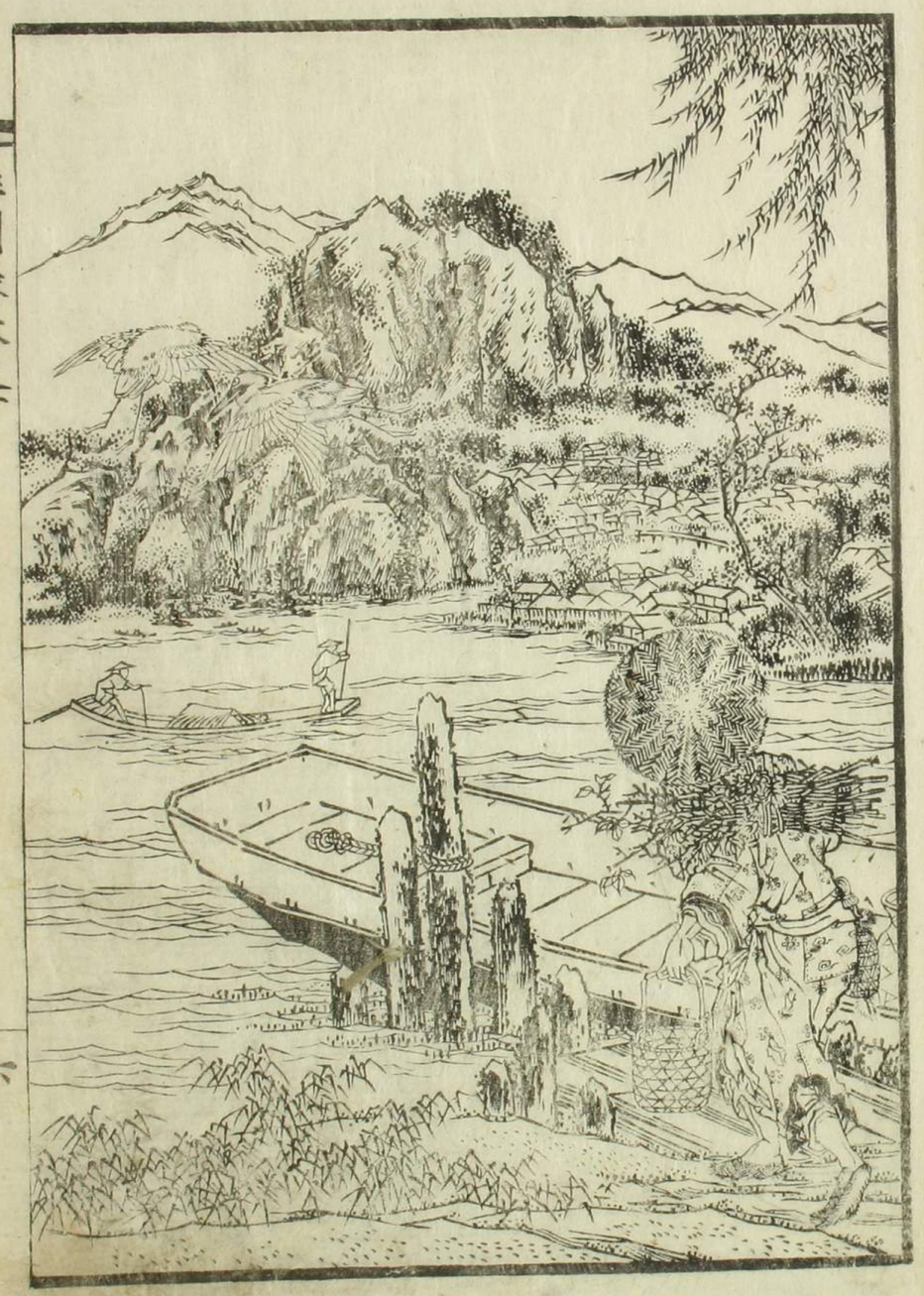
冷孝子は名を昇と云て益都顔神鎮の人なり諸生儒者なり父の植元
人の名遠遊を好て明の崇禎十二年己卯歳嶺表地名に行て帰らず夫

より世の代りゆく兵亂の為に隔ら且て三十年に及び且孝子想ふこと肇慶道の趙君韞（趙氏の人君韞と名ふ）身を寄て従て端州に行て父の在所を訪んとて或日山東の人喬某と云者西粤の方に往んとて聞て孝子孤んぬるに父の行方を尋問ん事を頼む其より一年を経て喬某返来て曰微に聞に足下の父は龍州の土司（庄屋）として殺せられたりと云孝子聞て趙君韞を辭し別を告て出たつ先洋洞江（江の名）を溯て三百七十餘の難を歴て横州（地名）より南寧（地名）に達し又遷隆思明（地名）を経て行事五千里ばかり茲にかつての人蔡氏鄙氏の二叟に遇ふ此両人も父と共に舊龍州の土司を勤る者なり其より連ぎて往ば又葬師の譚姓なる者に遇て遂に龍州の北門なる交帯橋の側に於て父の櫬を見る亥を得て骸骨を負て家に帰り孝子自其始末を叙て龍州扶櫬記と云文を作る

干江

郷民に干江と云者あり其父田間に宿て計らず狼に食る時に干江が年十六なり父の履物を遺て家を走て悲泣て歩て死せんとて夜に入て母の寢ぬる後に潛に鉄錘（錘に謂之權。和名抄）を持て家を出父の死せる處に行て父の離を殺んとて少間ありて一ツの狼来て立ながらて干江を嗅ぐ干江身を動さず居ば狼尾を揺て額を掃て又うつむきて干江が股を舐ども動ず身を動ずるを見て狼躍て来て其額を齧んとて干江を蹴て錘を以て狼の脳を繫て立ながら斃る後取て草むらの中に入て少間ありて又一ツの狼出来ぬ前の如くして

孝子吳の市中に在て母を養ひ船を賣しあふ圖



あるとき夜半に至る迄狼いづく来ざるべし少しく瞑する程に
夢に父の来て曰汝二つの狼を殺せり我恨をなすべしとて我を
殺せるに彼二物にあらず鼻の白き狼なりと云干江夢さめて
又臥て夜の明るを待居るに来ざりしかば二物を曳て帰らん
とせしが母の驚死なんを恐れて諸を智井に投入れて帰りぬ其
夜復彼處に往て俟に亦至るに斯すること三四夜なれども忽ち一つの狼
出来て干江が足を齧て曳き行こと数歩なれども棘に肉を刺されて石ゆえ膚
を傷るべし干江あらえ忍びて死せる者のやうにを狼干江を地上に置て
腹を齧んとする時驟に錐を以て打仆して連ねて遂に殺せりとて
視るに真に白鼻なりしを買て家に帰て始て母に告るべし母大に泣て

喜ぶこと尽て共に智井に至て二狼を探て帰て来るとぞ

珊瑚

安大成は重慶地名の人なり父孝廉早く卒して弟に二成と云て年いまだ
幼し大成が妻は陳氏にて字を珊瑚と云て大成が母は沈氏なり其性ひがみ
て情あらず常に珊瑚を罵辱むれども珊瑚怨める色を為ず朝とに早く起
身の炊ひして夫姑に見えて折しも大成をこして疾とあれば母まで珊瑚の湯を
誨るにとて痛く詬責珊瑚まで炊を為ずして進めず母やまて怒るに
甚大成ひとり孝子なれば呵て珊瑚を鞭うつに母の怒少しく解て此より母
まで珊瑚を憎む珊瑚公を盡して仕れども母一倍を交るるに大成母の
怒て我知らず常に他所に宿て妻と共に寝ず斯ても母の心をさやらず

物事に付て怒り罵る其意なども珊瑚が身上にあり大成が曰妻を娶るに
母に仕へしめん為也然るに斯母の心に合ざれば何を以て妻と為さんと云て遂に
珊瑚を出さ老媼をして送らしめて里門を出んとする時珊瑚泣て曰女子と
生まれて人の婦と為る事あさいなど何を以て我雙親に見えんや外邑
と云て袖の中より剪刀を取出し喉を刺す老媼あわてて抱とめ血溢て
襟を沾すに至れり かうして扶けて大成が蟠の家に連れ往て預けぬ此蟠も
王氏ゆえ寡居ゆえ居なり老媼帰て大成に告げれば大成さること他に漏るな
ゆえと言に日を経るうち珊瑚が創安く平うに成ぬと知て大成王氏が門
に赴いて珊瑚を留め王氏の無用也と云に王氏あず内に入れと云へば大成今
ぞしく但珊瑚を逐出さんるを恐れて時に珊瑚出て大成を見て問て曰

妾に何の罪ありて出し王氏や大成が曰汝母に事るとあるに非ざれば也
と云に珊瑚答て曰あさいなど惟首を俯して泣て泪をぐく赤くして
素絹を紅に染ぬ大成も心なしくて詞を盡さして退き帰ぬ
数日ありて母此由を聞怒て王氏が宅に至て悪言をのて王氏を罵る
王氏もあらえず沈氏が惡を数へひて又曰汝が娘已に離別せれば娘に非
ず我陳氏の女を家に養て安氏の娘を養ふに汝他人の上を言
るなりと云沈氏此一言に返せば祠あて又王氏が勢ひに恐れ大に哭
して家に返れば珊瑚安からず他所に適んるを恐れ茲に又大
成が母の妹に干媼と云あり年六十に餘て子をさだめず唯姪孫
と寡なる媳とのみ暮し居なり此干媼なく珊瑚が志を知りて

珊瑚王氏に別れて干媼が方に来て身を寄せ干媼一々其由を問て
曰我妹子の昔暴に起れり我汝を送り還さゞると云へば珊瑚かく是
を止め且吾此處に在るの吉王に対するを以て其より干媼が宅に居
て日を送りぬ珊瑚両人の兄あり聞て憐ぶて外に嫁せしめんと欲れ
ども珊瑚ふつに従はず唯干媼が傍に在て紡績を事として日を度りぬ
大成婦を出して後母所くの人を頼て大成が為に婦を迎へんとすれども母
の心悪きるを人傳へて噂しなれば誰人か婚を為さん然るに三四年を
過しぬるに二成長して藏姑と云つる妻を迎ぬ此藏姑驕悍なる
夏母に倍せり母怒るに色を以てすれば藏姑怒るに聲を以てす二成懦弱
にして妻の言に従へり是より母の威漸くに藏姑に及て嫁の意に

さるぬ媳の意に叶へるの難し藏姑母を侮ること婢の如くなれば大成敢て言
ず母と相對して泣のみ遂に鬱積の疾にうつりて床に臥して起臥の介抱
して大成一人のみ為すべき晝夜寐る暇能ざる両眼盡く赤くなれり弟を呼て
介抱を為さしめんとすれば弟室に入て早く藏姑喚て外に去らしむ大成
せんすべ無く干媼を頼て母の介抱をさせんと乞干媼が門に入て泣て其事
を訴へ折から珊瑚幃中より出て成兄と大成大に慚て言さしてく出んとする
を珊瑚両人ゆく扉をさへて大成急に道をそぐ出行けるさるぬ家に
帰て此由を語らるるに干媼来て病を看るに母喜て此を止め
て宿せしむ是より日毎干媼が家に入をおこせ旨記食を干媼が方に送
る干媼媳に言を傳へて公を費さるの為と云さるぬ食を送るの休む

時に一干媼此食を病者に進む病もとゝく宜き時干媼が孫母のいひけ
りとゝく佳き食物を持ち来て疾いかゞと問へ沈氏歎じて曰賢なる哉此
婦あく姑ゆへ何の幸有て斯る媳を得る玉つるぞ干媼が曰妹汝さゝ公なる媳
を如何なり一沈氏が曰珊瑚ハ弟の婦の如くなるぞ然れども甥婦の賢ゆへ
及ばぬ干媼が曰珊瑚が在一時ハ汝苦労を知らぬ汝怒れども珊瑚怨
ぬいかぞ我婦ゆ及ばぬとなふや沈氏泣て悔て曰珊瑚ハ嫁せずや未嫁せざる
や答て曰我も知らぬ人ゆ訪へと云へ数日ありて病全く癒ければ干媼帰
らんとする後沈氏泣て留て曰姑去ぬ玉ぬ我ぬ死せぬ干媼大成と
相謀りて二成と居宅を分んるを云藏姑ゆ是を欲せぬや有ん大成と下
媼に後罵る大成良田を以て弟ゆ與へんと言へば藏姑喜て受ぬ

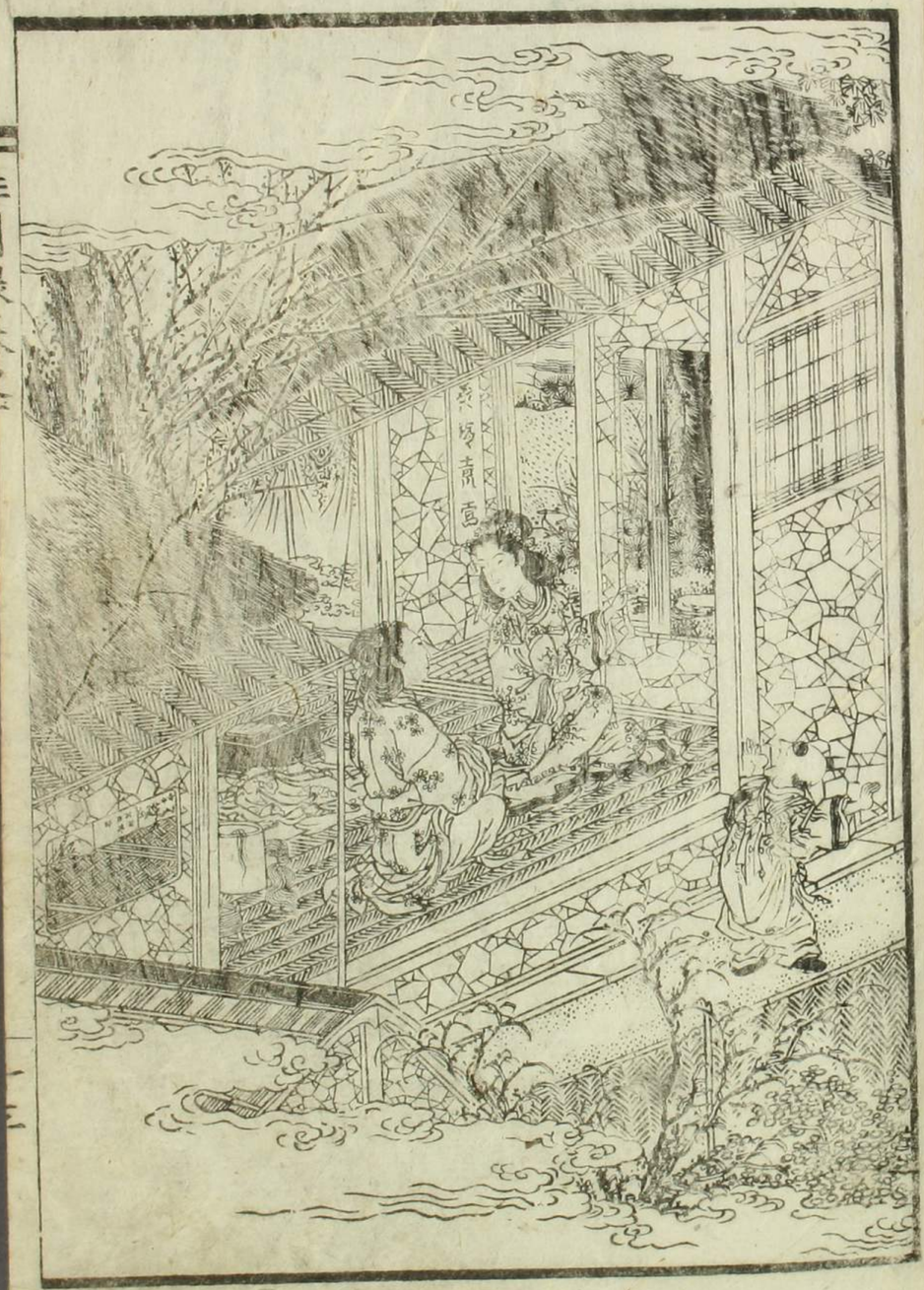
其時家財を分ゆるの書を作て渡しゆ干媼此日家ゆ帰ぬ翌日
車ゆて沈氏を干媼が家ゆ迎ゆ後が沈氏来て先甥婦ゆ見へんと云へて
甥婦の徳を誉る事ゆぎりなし一干媼が曰小女子善ぞゆ有ぞも少の疵
なるゆんや吾ゆて是を憐ぞて媳とを汝媳ゆて我媳の如くなりぞも汝
憐て長く保つる能ず沈氏が曰ゆ是ハ寃なり我豈臭と香とを知ぞん
や干媼が曰珊瑚が如き者を追出て念ゆるゆも無き汝なれば言所なれ
ぞ沈氏曰珊瑚ハ一甥婦の如くなるぞ我いぞ念へぞゆん干媼が曰然ゆば言聞
ぞん向ゆ遺る所の食ハ并ゆ病中の事を助つる者ハ我媳ゆ非ぞ汝が媳なり
沈氏驚て其説いふと問ふ干媼が云珊瑚我家ゆ在る久一是ゆぞ汝ゆ送
るゆ皆渠が夜ぞゆ績る料ゆて一ゆ有り沈氏聞ゆ泪を流一

我何を以てか媳が面を合せんと云干媼珊瑚を呼び珊瑚涙を含て出地に伏
して禮をなす母いたく慚てこぶうちに胸を打て干媼之を止む遂に初の如
姑媳とあり十日ばかり止て居て遂に誘ひ連ごうて家に帰りて大成が家
内へ出て薄田いくら持て其日を暮すも足らぬ二成が家へ大に富てあれ
ども大成が貧を助けず兄弟垣を隔て住居れども藏姑が貧困も毋
も及べざりしかども生れつきたる虐心なれば夫を始め婢を罵ること甚く
婢遂に経て死を婢が父藏姑を官に訟へ二成婦に代て官に出られ
て大に呵責を受て藏姑も械を受て十指の肉ちぎれ脱せり二成田畠
を質とりてやはりしきて家に帰りぬ其後債家の催促よ
堪ぬ是非なく良田を以て村中なる任翁と云者に鬻く任翁田の半大

成が讓れとて呼れば大成を呼て券の判をなす大成任翁が所に至る時
任翁忽氣色かはり大成に向て我なれ汝が父の安孝廉なれ任某何
者なれば今吾田地を買んとすると云て又曰眞間汝夫妻の孝に感じ
暫時汝等に逢ものを赦せり大成曰父亟あれば吾弟を救玉へ
父曰逆子悍婦惜むに足らず汝家に帰らば速に金をとりて吾血産を贖
ふべし大成曰母子辛うして世をこれまで何とかヨヌくの金をぬんや父の
曰紫薇樹の下に金を埋て置て取出して用ひべしと云て再問んとすれ
ども又吾らを任翁夢の醒る如く正氣付ぬれど已に言ることを知らず
大成辭して帰る藏姑廚より入を紫薇樹のもとに往て窖を發て
見るに博石のみ有て金なし本意なく家に帰ぬ大成是を聞て

母と妻と成戒め往く視るるもの是とのみ扱ふ無きと聞く母竊に
往く窺ひ見るに磚石土中に雑ふるもの遂に帰る珊瑚ひきつ
づき往く見るに土中悉く白鑞なり夫を呼くらせむるに果して
ねあり大成おび二成を召く均しく成分ち各嚢に入く帰とり臧姑
夫が持帰る嚢を開くるに嚢中さで瓦礫のみあり皆人大に駭く臧姑
夫を兄の家に遣りく窺ひしむ兄金を几上に置く母と共に相慶く
居り入く兄にちぐと語ひ大成も大に駭き此金を取く二成に與ふ二
成往く債家に返し兄の徳を賞す臧姑曰身に覚えなくそ誰か且分ち
取る物を又ちぐく譲るの有んやと云く聊之を恩とせば次日債主
が家より僕来りく曰償所の金皆偽金なり此夏官に訴へんと云に夫婦

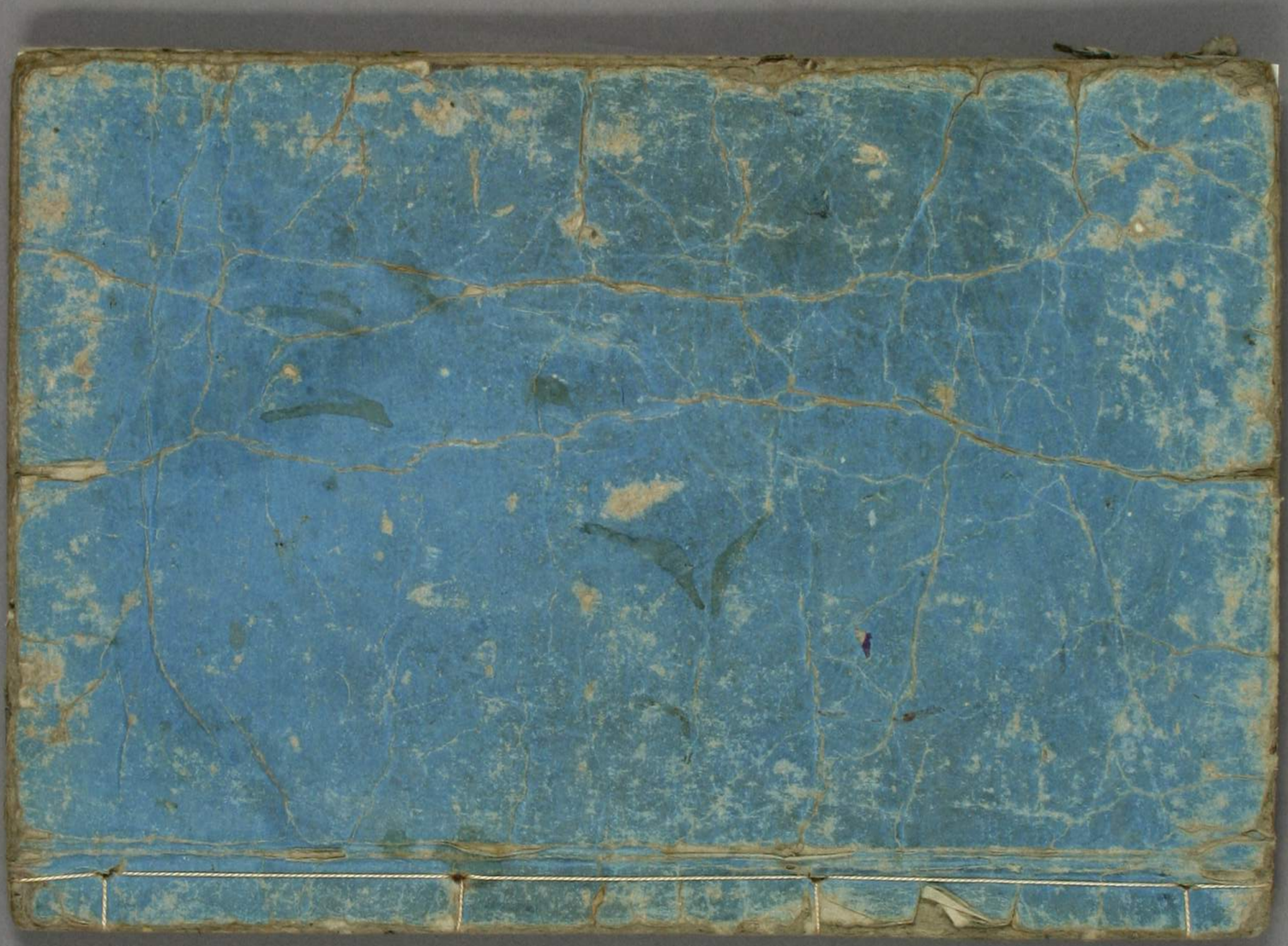
色を失ふ中に臧姑が曰我元より兄の賢此に至らじと想へり此
ものを汝を殺さんの計ありと云二成大に惧れく債主に往く乞ひ田畠
を賣りく券を渡し始の彼偽金を取く家に帰り細密に視れば鈦を切
く改めたる銀二枚あり成見るに韭葉の如く薄き金ゆく銅を裹る物なり
臧姑二成と計り断る物を已が家に留め餘は兄に返し送る大成其
意を知らざれば再三譲りく受ず二成堅くいなみく置く去りぬ大
成此金を秤り見れば五両あまり少くれば珊瑚に命じく其數を満さし
め推りく債主の家に至りく弟が入れし田地の代を償ふ債主二成が金
を以て成疑ひとくく是を驗見るに紋色足りく相違なれば金を収
めく大成に券を返しくるとさく又二成に兄の金を還しく後意に偽金



二成千媼が
家ヲ來て
大成の誤を
珊瑚ゐ示す
圖

ゐるとぞむづうるるやわらんと想ひ居るゐ兄債主ゐ金を返し舊業成つの贖つやと聞く大ゐ之を奇む臧姑又疑ひを生じ成ゐ金を掘りし時大成先真金を得て隠ゐあるべしとて大成ゐ家ゐ往て責てゐ罵る大成此時衛弟ゐ金を反さず故を悟り知るり珊瑚臧姑を迎へて笑つ曰産ハ固るゐ此ゐ在り何ぞ怒りあるると云て夫を召て券を出さ臧姑ゐ渡し遣り此夜二成ゐ夢ゐ父来て責て曰汝不孝不弟なり一寸の地も汝ゐ物と為ぐゐ非ず然る我強て求め取んとすやと云て怒る事甚しと見て醒て後臧姑ゐ語つて田畠を兄ゐ返さんと云へば臧姑愚なりとて嗤ふ時ゐ二成両人の男子あり何ぞ無くて長男痘を病て死り臧姑夫の夢を想ひ合せ惧て二成を召て券を兄ゐ贈らしむ大成受ぜ又

幾ばくも無く次男又死り臧姑いよいよ惧て自券を嫂のもとゐ持ち往て置て帰りぬる春ぞゐ畫んとすれぞ田を耕す者なければ大成已夏を得ぜしく之を殖種臧姑此より行を改め母ゐ仕へて孝を致し嫂を敬て亦至て未半年を過ぎ母病て卒す臧姑哭し慟て曰姑早く死て我をして事なるるゑねぎしむ是天我不孝の贖を許し玉へぐる也と泣く哭けり臧姑産をるる卜度なれぞ皆育ぐゐ遂ゐ兄の子を以て子とす大成夫婦皆壽を以て終れり二子を生るゐ皆進士ゐ舉られ入是を孝友の報なりと云なり

奇説排門録巻之一軸

吉田屋